
アイドル探偵 2 「餃子の恨みはしつこい」編

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドル探偵 2 「餃子の恨みはしつこい」編

【Nコード】

N7641K

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

駆け出しアイドル・スウこと白木寿々菜と、トップアイドル・KAZUこと岩城和彦のアイドル探偵シリーズ第2弾！
和彦が主人公を演じる「御園探偵」の模倣犯が現れた！
しかも犯人は、よりによって和彦の愛する餃子にまで手を出し、和彦の恨みを買う。更に事件は殺人にまで発展し・・・

第1話 怪盗ラパン

それは小学校の隣の小さな文房具屋から始まった。

大型スーパーが消費者のニーズに100%応えられるこの時代に、どうやって収益を上げているのか分からないような小さな文房具屋。

そこ店主の60歳の男性が、

（というか、従業員は彼1人だ。この人件費の低さこそ、この文房具屋の強みである）

そろそろ閉店するか、とアバウトなことを考えながら店の掃除を始めた。

それは、消しゴム売り場のキャラクター消しゴムの上に置かれていた。

トランプ位の大きさの白い紙。

店主が、なんだろうと思い手に取ってみると、そこにはコミカルなウサギの顔が描かれていた。

伊達政宗のように、右目に黒い眼帯を当てた「海賊風ウサギ」。

店主は、「こんな売り物あったかな？それとも客の忘れ物かな？」
と思い、

レジの脇にポンっと置いた。

そしてそのカードは、しばらくそこで眠り続けることになった。
世間の注目を浴びるなど、思いもせずに。

「寿々菜！昨日の『御園探偵 第5弾』見た！？」

白木^{しづきすず}寿々菜^なの親友、長谷川^{はせがわともか}友香が、
寿々菜が登校するなり駆け寄ってきた。

寿々菜は得意げにVサインをしてみせる。

「当たり前でしょ！録画して、もう5回も見ちゃった！」

友香は頭の中で電卓を叩いた。

「御園探偵」は単発物で、1年に1、2回、2時間枠で放送される。
その第5弾が昨日の午後9時から放送された。

寿々菜は当然、リアルタイムで1回見たのだろう。

そして、放送が終了した11時から、後4回見たことになる。

2時間 × 4回 ≡ 8時間

11時から立て続けに見たとして・・・

「寿々菜。あなた、昨日寝てないでしょ？」

「どうしてわかったの？」

「・・・」

理由を説明するのも面倒になり、

友香は席に戻った。

とたんに、隣の男子生徒が友香に話しかける。

友香も愛想よく応じる。

この男子生徒、友香の彼氏という訳ではない。

男子生徒の一方的な片思い。

こんな男子生徒はたくさんいるので、友香も慣れっこだ。

つまり・・・友香はモテる。

そして美人。

駆け出しアイドルの寿々菜よりも遥かに。

いつそ寿々菜を解雇して友香を雇った方が、寿々菜の所属する門野プロダクションは確実に儲かるだろうが、

幸い（？）社長の門野はまだ友香を発見していない。

弱小プロダクションのワンマン社長のことだ。

友香を発見した暁には、それをあっさり実行するだろう。

自分がそんな危機的状況にあることにも全く気づかないのが寿々菜の長所というか短所というか。

早速机に突っ伏して、朝寝を始めてしまった。

寿々菜も身長だけは友香と同じ160センチで、スタイルも小さな

胸を除けば悪くない。

顔も平均は軽くクリアしているが、あくまで「一般女子の平均」であり、

「アイドルの平均」ではない。

そんな寿々菜が「スウ」というセンスのない名で芸能界の荒波に飛び込んだのには理由がある。

それが「御園探偵」の主人公・御園英志^{みそのえいじ}を演じる、KAZUこと岩^い城和彦^{わきかずひこ}だ。

同じ事務所とは言え、寿々菜はトップアイドルの和彦とは何の接点もなかったが、
とある出来事をきっかけに、知り合うことができた。

寿々菜は天にも舞い上がる気持ちだったが、
21歳の和彦から見れば、高校1年生の寿々菜は「手のかかる妹」と言ったところか。

寿々菜は夢を見た。

昨日の「御園探偵」の夢だ。

和彦さん、ううん、御園英志、相変わらずかつこよかったなあ・・・
最近和彦さんに会っていない。

和彦さんは私と違って忙しいもんね。

でも、会いたいなあ・・・

そういえば、御園英志もかつこいいけど、
ライバルの怪盗ラパンもかつこよかった。

ラパンは「御園探偵 第1弾」から登場してるけど、いまだ正体は分からずなんだよね。

御園英志もラパンにだけは手を焼いている。

ラパンは、いつどこで何を盗むか、警察に予告状を出してくる。

警察も御園英志もラパンを捕まえるべく奮闘するんだけど、

いっつも鮮やかに逃げられちゃうんだよね。

そういえば、ラパンを演じている俳優さんはなんて名前だっけ？
CMとかでよく見るんだけどな・・・

「白木。起きろ。授業を始めるぞ」

「むにやむにや」

「むにやむにや、じゃない。かくなる上は・・・」

教室に入ってきた若い国語教師は、寿々菜がアイドルということも忘れて、

（最初から知らないのかもしれない）

寿々菜の顔に水性マジックで落書きを始めた。

クラス中が興味津々で見守る中、教師の筆、じゃなかった、マジックは順調に進み・・・

まもなくソレは完成した。

「あ。ラパンだ。先生、うまい！」

「お？わかるか？昨日テレビで見たから描いてみた」

「すごい！眼帯とか、超リアル」

「それでも学生時代は美術部に所属してたからな」

胸を張った教師の前で尚も眠り続ける寿々菜。

その顔は、眼帯がトレードマークの怪盗ラパンそっくりに仕上がっていた。

第2話 応援と苦情

「山崎さん。KAZUさんにお客様がみえてるんですが」

スタッフの女の子に声をかけられ、和彦のマネージャーの山崎は顔をしかめた。

「見ての通り、KAZUは仕事ですから。待ってもらつか出直してもらってください」

山崎は眼鏡を直して、スポットライトの中で次々とポーズを取る和彦を見た。

いや、見つめた。

最近色気が出てきた噂の山崎。

その原因こそ、和彦その人である。

早い話が、山崎は和彦に惚れているのだ。

和彦は、たとえば、いくら色気があると言っても30歳の、しかも男に惚れられても、全く嬉しくない。

はつきり言って迷惑である。

が、山崎のマネージャーとしての腕は確かだ。
弱小の門野プロダクションは人出も少ない。

という訳で、渋々我慢している。

今もカメラの前に立ちながら、山崎の熱い視線には気づいているが、

敢えて気づかない振りをしている。

「演じる」ことは、和彦の特技である。

「あの、でも・・・」

まだ立ち去ろうとしないスタッフに、山崎は少しイライラした。

和彦さんは仕事してるんだ！
邪魔するんじゃない！

「警察の方、なんですけど」
「警察？」

さすがに山崎も驚きを隠せない。
が・・・

「それはもしかして・・・武上さんという人ですか？」
「はい。そうです」

どうしてそれを先に言わないんだ！！

山崎は撮影スタジオの出口に向かって走り出した。

武上、というのは、殺人事件を扱う捜査一課の若き刑事である。

和彦の顔見知りなのだが、この二人、事あることに対立している。

和彦ヒイキの山崎からすれば、和彦の敵である武上は面白くない存在・・・

であるはずだが、実はそうではない。

山崎はある理由で、武上を「応援」しているのである。

「武上さん！」

「あ、山崎さん、こんにちは。すみません、お忙しいところ」「いえ」

山崎は愛想よく武上に近づいた。

武上は一目で仕事中和分かるようなスーツ姿だ。

しかしそのスーツは、山崎のような上等な物ではなく、至って庶民的なお値段のスーツである。

「和彦さん、今雑誌の写真撮影なんですけど・・・お急ぎでしたら、呼んできますよ？」

武上としては、和彦が仕事だろうがなんだろうがどうでもよかったが、

ここは一応社会人として、礼儀を優先させた。

「いえ。待たせていただきます」

「そうですか。申し訳ありません。・・・あの」

「はい？」

「時に、武上さん。スウとは・・・どうですか？」

武上と山崎が意味ありげに視線を交わす。
そんな必要は全くないのだが、二人は思わず周囲に人がいるかまで確認した。

「まあ・・・たまに食事に行ったりはしますが」
「そうですか。頑張ってください」

山崎は「応援」した。

そう。

山崎にとっては、和彦の敵である武上よりも、
和彦に惚れている寿々菜の方が邪魔な存在である。

寿々菜の「個人的なファン」である武上と寿々菜がくっついてくれれば、

山崎としては万々歳なのだ。

だが武上は、曖昧に「はあ」とだけ答えた。
なんせ寿々菜は、武上の気持ちに全く気づいていない。
「一般市民を食事に連れて行かなきゃいけないなんて、お巡りさんも大変ですね」ときている。

山崎ははっとした。

寿々菜のことに気を取られていたが、
仕事上の武上が、わざわざ嫌いな和彦に会いに来たのだ。
これはもしか・・・

「武上さん！もしかして、和彦さんに推理のお願いにきたんですか！？」

和彦は、御園探偵シリーズで鍛えた（？）推理力で、以前、武上が担当する殺人事件を解決したことがある。そして山崎はそんな和彦に惚れたのだ。

もしかしたら、またあの実写版「御園英志」が見れるかもしれない！

しかし武上はそっけなかった。

「そうじゃありません。一市民として、一言文句を言いに来ただけです」

「文句？和彦さんにですか？」

「和彦に、というか、御園英志に、というか」
「？」

ちょうどその時、撮影の休憩に入った和彦がやってきた。

仕事中は、カメラが回っていてもいなくても営業スマイル全開の和彦だが、

武上を見たたん「素」になった。

「なんだ、てめーか、武上。何の用だよ」

「用って程じゃない。なあ、御園英志はいつになったらラパンを捕まえるんだ？」

和彦は、「意外だ」と言うように、目を見開いた。

「お前、御園探偵なんて見るのか？俺が出てるのに？」

その聞き方はどうかと思うが。

「見るわけないだろ。でも仕事上、仕方なくさっき見た」

「さっき？」

「婦警が家で録画してたのを持ってきてもらったんだ」

訳がわからない。

どうして仕事中の刑事が御園探偵なんぞ見なくてはいけないのか。

理由によっちゃあ、税金の無駄遣いだ！と、トーク番組で非難してやろう、

と、心に誓う御園探偵の主人公である。

だが。

和彦も山崎も、

武上が上着の内ポケットから取り出したビニール袋を見て、目を疑った。

そこには怪盗ラパンの予告状が入っていたのだった。

第3話 カード

黒い眼帯をしたウサギの顔が描かれたカード。

間違いなく、「御園探偵」の怪盗ラパンが使う予告状だ。

「武上。ドラマの小道具盗むなよ。警察のくせに」

「そんな訳ないだろ。これは正真正銘本物だ」

「・・・本物？」

和彦は眉をひそめた。

「どういう意味だよ、本物って。まさかラパンが現実に出たとか言わねーだろうな？」

そんなバカな、と思いながらも一応言ってみる。

しかし、武上は頷いた。

「そのまさかだ。ただしこれは警察に送られてきた予告状ではなく、犯行現場に置かれていた」

「犯行現場？」

「昨日、宝石店で宝石が盗まれたんだ。そこにこのカードが置いてあった」

「なんだって？」

和彦の声が大きくなる。

「さすがにドラマみたいに、警察に予告状を送るなんて大胆不敵な

ことはできなかったんだろう。

でも、これでもじゅうぶんに警察を舐めてる」

「・・・模倣犯か」

「この場合、模倣犯というか、ただのお遊びだ。ある意味、愉快犯」
愉快犯というのは、目的があって犯罪を起こすのではなく、
犯罪を起こすことを目的に犯罪を起こす・・・つまり犯罪を楽しむ
人間のことである。

「昨日たまたま宝石なんか盗まれたからわかったんだが、
最近あちこちで同じような事件が起きてる」

「はあ？」

「数箇所の交番に被害届が出てたんだ。でも盗まれたものが、安い
物ばかりだったから、

警官もあまり真面目に対応してなかったらしい」

「・・・ひどいもんだな、警察も。で、その現場にもこのカードが
あったのか？」

「そうだ。だから警官も『ドラマを見た子供のイタズラだろう』と
思ったそうなんだ」

「ちよつと貸せ」

和彦は武上からカードの入ったビニール袋をひったくった。

・・・よくできている。

本当にドラマの小道具みたいだ。

が、やはり本物とは少し違う。
恐らくウサギの絵を手で描いて、パソコンに取り込み、プリントア
ウトしたのだろう。

「鑑識の結果、それを作ったパソコンもプリンターも多く出回っている品で、

誰がどこで作ったか特定は難しいそうだ」

「ふーん。ところで武上。お前、いつ捜査一課から移動になったんだ？」

お前の専門は殺人だろ。窃盗は他の部署がやるんじゃないのか？」

よく知ってるな、くそ。

武上は心の中で毒づいた。

「この事件を知って、上司に思わず『御園英志を知ってます』と言ったら、

ラパンの捕まえ方を聞いて来い、って言われたんだよ」

「・・・」

上司は冗談で言ったのだろうが、こうやって真面目に聞きに来るところが武上らしい。

「せっかく来てもらって悪いんだが、それを知ってりゃ御園英志も苦労しない。

仕事の邪魔だ、さっさと帰れ」

和彦は手をひらひらさせて武上を追い払うと、さっさとスタジオへ戻って行った。

ま、期待はしちやいなかった。
そもそもこの事件は、俺の担当じゃない。

武上はスタジオを出ると、近くのバーへ入った。
何も昼間っから飲もうと言う訳じゃない。
それこそ税金の無駄遣いだ。

別件の殺人事件があり、その聞き込みの最中なのだ。
寿々菜の声を聞くのが目的で、「和彦がどこにいるか知ってますか？」と電話したら、
間髪入れずにこのスタジオを教えてくれた。
マネージャー並に和彦のスケジュールを把握している寿々菜だから
こそできる技だ。

それがたまたま、聞き込みに行こうと思っていたバーの近くだった。
それだけである。

それにしても、この偽ラパン。
結構色んな物を盗んでいる。
本、服、宝石・・・

昨日盗まれた宝石を含め、金額的にはどれも大したことはない。
全て1万円以下くらいの安い物ばかりだ。
だが、数が多い。
もう10点以上の物が盗まれているらしい。

そう言えば、ドラマのラパンを真似てるからなのか、
被害にあってるのは全て店である。
個人宅から何か盗まれたという話は聞いていない。

しかも・・・

武上は再びラパンのカードを取り出してみた。

ウサギの右目の上、つまり黒い眼帯の上に、「1」という数字が白い文字で書かれている。

これもドラマと全く同じ。

ドラマの中のラパンは、こうやって眼帯の上に数字を書いて、その予告状が何枚目のものか分かるようにしているのだ。

『本日午後9時にS美術館からクロード・モネの絵画を頂く』 ↓

眼帯のNO・は、「1」

『明後日午前1時にA宝石店からダイヤの王冠を頂く』 ↓ 眼帯の

NO・は「2」

と言った具合だ。

何故ドラマのラパンがこんなことをしているのか武上は知らないが、演出上のことだろう。

全く、どうなってるんだか。

和彦も武上も、この事件のことはすぐに忘れた。
二人とも、寿々菜みたいに暇じゃないのだ。

だがその3日後、二人は再びこの事件を思い出させられることになる。

それは全く違う方法ではあったが・・・

限りなく不愉快な方法、という点では共通していた。

第4話 差し入れ

「あの！和彦さ・・・KAZUに差し入れを持ってきたんですけど」

忙しそうに動き回るスタッフの一人を捕まえて、寿々菜はなんとか声をかけた。

だが、そのスタッフは無碍に、

「ああ。じゃあ、向こうに置いて。君、見学の人？こんなところまで入ってきちゃダメだよ」

と言い、忙しいんだから声かけるんじゃない、と背中で語りながら行ってしまった。

CMの撮影現場なのだから、みんな忙しくて当然だ。

それに、「見学の人」というのも間違っていない。

和彦を「見学」しに来たのであって、仕事しに来たのではないのだから。

けど・・・

一応私だって芸能人なんだから！

心の中で文句を言ってみるが、これはスタッフが悪い訳ではない。どちらかといえば、デビューして1年以上もたつのに、ろくに顔を売れない寿々菜が悪い。

そして現に、こうしてKAZUファンの中に入っても、誰一人「ス

ウ」に気づく人はいなかった。

今日の和彦は、大きな公園でのCM撮影。

噂を聞きつけてやってきたKAZUファンだけでなく、

たまたま公園に遊びに来ていた家族連れなんかも見学に集まって来ている。

ざっと数えても100人近くいそうだ。

そんな中に、冴えない駆け出しアイドルがいても、気づかれなくて当然である。

だから・・・和彦が寿々菜に気づいたのは奇跡的と言っていいだろう。

カメラが止まると、和彦はすぐに寿々菜の方へ、つまり、ファン達の方へやってきた。

黄色い歓声が上がる。

和彦は必殺KAZUスマイルでファンに挨拶した後、そのままの笑顔で寿々菜を見た。

寿々菜は和彦が素を見せる数少ない人間だが、ここはファンの手前、KAZUモードを貫くことにした。

「寿々菜。どうした？エキストラの仕事？」

「い、いえ・・・あの、差し入れを・・・」

寿々菜はそう言って、両手で白いビニール袋を持ち上げる。

和彦はそれを見て、いや、正確にはその匂いを嗅いで、目を輝かせた。

「寿々菜！それ、もしかして！」

「はい。来来軒の餃子です」

来来軒とは和彦の行き着けのラーメン屋である。

「お、お前、いい奴だな」

和彦は半ば感動していた。

そして一瞬で素になってしまった。

「よし、こつち来い。監督にエキストラで使ってもらうから」

「ええ？」

和彦は、ファンが撮影場所にまで入って来ないように張り巡らされたロープを左手でグイッと上げ、右手で寿々菜の腕を引っ張った。

周囲からどよめきとともに、「あの子、芸能人なの？」と呆れた声がかかる。

が、和彦はお構いなした。

なんと言っても、来来軒の餃子を食べられるのだから！

すぐに監督に、寿々菜をエキストラで使ってもらおうと頼み込む。公園を歩いている、というだけの役だ。

監督もこだわらずにOKを出した。

その段階になり、寿々菜はようやく自分の服装に気がついた。

こんなことなら、もうちょっとちゃんとした服を着てきたらよかった。

エキストラなのだから目立ってしまつては話にならないが、なんと言つても寿々菜は通っている北原高校の制服なのだ。

制服のままテレビに出るのっていいのかな？

でも、もしかしたらこれで北原高校が有名になるかも！

公立の北原高校が有名になつても仕方がないし、

そもそもそんな訳ないのだが、寿々菜は独自の理論で納得し、俄然張り切った。

その時、ふと、自分に注がれている視線に気がついた。

お世辞にも好意的とは言いかねるその視線は・・・山崎である。

寿々菜は恋敵の山崎に思いっきりあつかんべーをした。

そして、山崎も負けじとあつかんべーをやらかえたのであつた・・・

さて、和彦は、と言えば、

キャンピングテールブルの真ん中に鎮座している餃子に今すぐにでもありつきたかったが、

さすがに「餃子食べるんで、撮影ストップ」と言えるほど、わがままなアイドルではない。

いや、どちらかと言えば（言わなくても）わがままなアイドルなのだが、

ここで撮影がのびると次のスケジュールに影響がでて、そのまた次のスケジュールにも影響がでて・・・

和彦の帰宅時間が遅れる。

それはつまり山崎と一緒にいる時間が長くなることを意味する。

和彦はさっさとCM撮りを終わらせようと決意した。

そしてそんな和彦のやる気も手助けし、撮影は30分後には無事終了となった。

くそー、餃子、冷めたかな？

と、和彦はいそいそとテーブルに近寄ったが・・・

「あれ？」

そこにはあるはずの餃子がなかった。

そんなバカな。

撮影中もチラチラ見てたのに。

そして和彦は、餃子の代わりにテーブルに置かれているカードに気がついた。

その中のウサギはまるでニヤリと笑っているかのように見えたのだ
った……

「武上！なんとかしろ！！」

課長の野原にどやされることなんか日常茶飯事の武上も、
今日ばかりは途方に暮れた。

だから、俺のせいじゃない！！

武上は警視庁の窓から恨めしそうに下を見た。
そこにはたくさんの人ばかり。
みんな大型カメラや照明を抱えている。
中継車までいる。

やれやれ。こんなことで騒げるなんて、日本は平和だ。

どこから漏れたのか、マスコミに例のラパン事件を知られてしまっ
たのだ。
大した事件ではないのだが、今流行の「御園探偵」の模倣犯と言う
ことで、この有様だ。

しかも、武上は窃盗事件の担当でもないし、何の関係もない。
ただ、御園英志役の岩城和彦と顔見知りなだけだ。
それなのに「なんとかしろ」も何もあつたもんじゃない。

武上は頭を振りながら、「おつかれさまでした」と席を立った。

第5話 怒鳴られまくり

「武上！なんとかしろ！！」

あれ？俺、30分前にも同じ言葉聞いたような・・・でも声が違うな。

「おい！聞いてんのか！？」

武上は思わず携帯から耳を離れた。

「うるさい！そんな大声で話さなくてもちゃんと聞こえてる」

「だったらさつさとラパンを逮捕しろ！！」

「それは俺の仕事じゃない。むしろお前の仕事だろ」

「俺は岩城和彦だ！御園英志じゃない！」

岩城和彦が御園英志を演じているのだから、この台詞は間違っていると言えるが、

今の和彦にそんなことを言っても火に油を注ぐようなものだ。

武上は耳と肩で携帯をはさみ、アパートの鍵を開けると靴を脱いで部屋に入った。

地方出身者の武上は大学時代から東京で一人暮らしをしている。一人の生活もいい加減なれたが、やはりそろそろ結婚もしたい。

俺は24歳だけど、寿々菜さんはまだ16歳だ。

そりゃ16歳でも結婚できるけど、まだやっぱり早いよな、うん、高校生だし。

せめて寿々菜さんが20歳になるまでは待とう。

後4年か・・・長いな。

それまでに俺の給料も少しは上がるかな？

「武上！聞いてるか！？」

「なんだっけ？」

「ふざけるな！！！！」

「えーっと、ウサギがどうかしたんだっけ？」

「ウサギじゃない！ラパンだ！」

「和彦。ラパンってのは、フランス語でウサギのことだ」

「~~~~~！！！！」

しばらく二人の噛み合わない会話が続いたが、非生産的なので省略しよう。

とにかく、現実のラパンに餃子を盗まれた和彦が烈火のごとく怒り、武上に電話をしてきただけである。

「だから。それは俺の担当じゃない。それに、その餃子を盗んだのは本当に、

あのラパンなのか？それこそドラマの小道具で誰かがイタズラしたんじゃないのか？」

「どっちでもいい！！とにかく餃子を盗んだ奴を捕まえる！！」

「・・・」

無茶というか、無茶苦茶な話である。

「まったく！せっかく寿々菜が持ってきてくれたのに・・・」
「・・・なんだと。その餃子、寿々菜さんの差し入れか？」
「そうだ」

「・・・」

武上は迷った。

寿々菜が持ってきた餃子が盗まれた、ということ、
和彦が食べようとした餃子が盗まれた、というのは、
武上にとっては天と地ほど意味が違う。

寿々菜さん・・・せっかく心をこめて(?)餃子を持ってきたのに、
それを盗まれてしまうなんて・・・
さぞ、心を痛めたことでしょう・・・

実際には、寿々菜は「ラパンだ！」とそのカードに夢中で、
餃子のことなどすっかり忘れていたのだが、そんなことは武上には
知る由もない。

「・・・わかった。そのカードを担当課に回すから持って来い」

「お前が取りに来い」

「・・・」

それからまたしばらく押し問答が続いたが、口では和彦には敵わない。
い。

結局武上は、明日和彦に会いに行く約束をさせられた。

そして、ため息をつきながら携帯を切った・・・と、同時に携帯が

鳴り出した！

なんだ！？

ディスプレイを見ると「野原課長（＜Ｄ＞）」。
ちなみに顔文字は武上の後輩が勝手に入れたのだが、気に入っている。

武上は脱ぎかけた上着を羽織り、
再び玄関で靴を履きながら通話ボタンを押した。

「武上！今、どこにいる！？」

今日はよく怒鳴られる日だ。

「自宅・・・を出ようとしているところです」

「お。さすがだな。現場はF町のJRの高架下だ」

捜査一課の課長からの電話といえば、事件の呼び出し以外ないだろう。

「被害者は？」

「身分証明書を持っていた。なんぶ南部小学校の女性教員・はらなみ原七海、25歳。

ナイフで刺し殺されているが、指紋は期待できないだろうな。それと・・・」

野原が楽しそうな声を出した。

殺人事件だというのに、何が楽しいのやら。

「あつたんだ」

「あつた？何がですか？」

「ラパンのカードだ」

「は？」

武上は思わず素っ頓狂な声を上げた。

「遺体の上に、例のラパンのカードが置いてあつた。鑑識でちゃんと調べないとわからんが、おそらく窃盗現場のと同じカードだ」

殺人？

ラパンが？

「御園探偵」のラパンは「怪盗」ってだけあつて、人殺しなんてしないんだろ？

それなのに、なんで現実のラパンが人殺しするんだ！

模倣犯なら模倣犯らしく模倣しとけ！！！！

意味不明なことを考えながら、武上は部屋を飛び出した。

こうしてラパン事件はめでたく武上の担当となったのである。

第6話 良い子？

翌日。

仕事で寝不足の和彦と武上と、

すっかり寝不足が解消された寿々菜の3人が来来軒に集まった。

「これで心置きなくラパン逮捕に乗り出せるな」

ニヤニヤ顔の和彦。

「俺が担当しているのはこの事件だけじゃないんだ」

イライラ顔の武上。

「アイドル探偵、再び！ですね！！」

ワクワク顔の寿々菜。

ちなみに山崎は、和彦が全力で振り切ってきた。

「はあ・・・あれか」

ニヤニヤしていた和彦の表情が一瞬で曇った。

以前、和彦が武上と寿々菜と共に殺人事件を解決したことがあるのだが、

社長の門野が「これは視聴率が取れる！」とテレビ局に特番を組ませた。

その名も「アイドル探偵」。

KAZUとスウの名付け親である門野が考えたネーミングだ。この程度で勘弁してやってほしい。

「しかも、ラパン事件ですよ！和彦さん以外の誰が解決するんですか！」

「・・・御園英志でも出てこないかな」

和彦は本気で言った。

「はいよ。ラーメン3人前に餃子3人前」

「お！おばちゃん、ありがと！」

「それと、これでよかったかい？」

来来軒のおばちゃんは、ラーメンの横に地図を置いた。配達で使う物である。

「悪いな。明日新しいやつ買って返すから。武上が」

「おい」

和彦は、先日食べそびれた餃子を頬張りながら地図を見た。箸を赤ペンに持ちかえる。

「窃盗事件があったのが、こことこことここと・・・」
「あと、こつちもだ」

「それと・・・」

次々に事件現場に赤丸をつけていく。

「それに、昨日殺人事件があったのが、ここだ」

武上がF町の高架下を指さした。

和彦がそこにバツをつける。

「武上さん。昨日のニュースじゃ、殺人現場にラパンのカードがあったことは報道されてませんでしたけど」

「全力で隠しています。たださえてもこれだけ話題になっているのに、

殺人事件にまで発展したとなつては大騒動ですからね。

それに、ドラマの御園探偵の方にも影響がでるかもしれません」

ドラマの模倣犯で殺人が起きたとなると、ドラマを自粛せざるを得ないかもしれない。

そのあたりは一応警察も気を使っているのだ。

いや、婦警から猛反発があったというのが真相ではあるが、そんな和彦が喜びそうなことをわざわざ教えてやる必要もない。

「殺人事件と窃盗事件は、同じ犯人なのか？」

「カードは同じ物だった。だけど、警察としては別の犯人だと睨んでいる」

殺人事件は、話題の「現実のラパン」に乗った通り魔との見方が強い。

「理由は？」

「色々あるが・・・模倣犯というのは『模倣する』ことに重点を置く。」

それなのに、殺人をするなんてそのポリシーに反すると思うんだ」

「ふむ」

「それに、これだ」

武上は一枚の紙を取り出した。

「きつたねー字だな」

「うるさい。昨日、窃盗担当の刑事に教えてもらって走り書きしたんだ」

そこには、窃盗事件の詳細が記されていた。

「発覚しているだけで、窃盗事件は12件起きている。最後の12件目がお前の餃子だ」

「おお。許せねえ。ドラマのラパンもまだ5個しか盗んでねーのに」

先日放送された「御園探偵」が第5弾なのだから、当然である。

「犯行時間を見ても。まあ、犯行時間というか、盗まれたのがわかった時間だから、

実際の犯行はもう少し前の時間帯だろうけどな」

和彦と寿々菜は頭を寄せ合って、それを見た。

雑誌・・・H書店 9月8日（水） 午後4時半頃 ラパンのカードのNO.は「3」

服・・・Rショッピングモール　9月13日（月）　午後6時頃
カードNO.は「4」
宝石・・・E宝石買取センター　9月21日（火）　午後5時頃
カードNO.は「5」

等々。

ちなみに餃子は「Y公園　9月26日（日）　午後1時頃」である。
カードNO.はもちろん「12」。

「ふーん」

「で、昨日の殺人事件が、9月29日（水）　午後10時、だ」
「なるほど、殺人事件だけ妙に遅い時間だな。」

でも、窃盗は人にまぎれる為に人が多い時間帯、殺人は人目につかない時間帯、ってだけなんじゃないか？」

「うん・・・そうかもしれないけどな。なんとなく一貫性がない、
って言うか」

「そうだな。殺害現場にあったカードのNO.は？」

「それが、そのカードだけNO.がないんだ」

「・・・」

武上と和彦が腕を組んで唸っていると、
地図と武上が出した紙を見比べていた寿々菜が首を傾げた。

「・・・和彦さん」

「ん？」

「・・・なんか・・・」

「おっ。来たか？」

和彦がぱつと顔を上げた。

寿々菜は、和彦のような推理はまるでダメだが、どういう訳か、勘が鋭い。

少しでもおかしいことがあるとすぐに違和感を感じることができる。もつとも、その違和感の原因を探るのは和彦の仕事だが。

「違和感、って言うか・・・殺人事件と餃子以外は、全部似たような犯行時間ですよね」

「そうだな。午後4時から6時ってところか」

「それに犯行現場も・・・全部近いですよ。どうしてもでしょうか？」

「どうしてって？」

「なんていうか、どうしてもこんな時間も場所も限られてるんでしょうか？」

「すぐに捕まっちゃいそうじゃないですか？もっとバラバラにすればいいのに」

「・・・確かに」

和彦は地図を持ち上げた。

現場は本当に狭い範囲内だ。

「犯行現場が限られていることは警察内でも注目してたんですが・・・なるほど、犯行時間と組み合わせると・・・」

窃盗犯に関しては、午後4時から6時に、この範囲を動ける人間ってことですね」

「逆だろ」

和彦が言った。

「え？」

「だから。午後4時から6時にこの範囲を動ける人間、じゃなくって、
午後4時から6時にこの範囲しか動けない人間、だ。しかも平日の
な」

餃子は日曜だった。

それだけは午後1時だが、後は平日の午後4時から6時だ。

和彦は、地図の赤丸を線でつなげて行つた。
それは放射線を描いている。

その中心は・・・

「南部小学校!？」

殺された原七海が勤めていた学校だ!

「なるほどな。これなら犯行時間が午後4時から6時つてのも頷ける」

和彦は、ニヤッと笑った。

「良い子は学校が終わったらさっさとお家に帰らないとダメだもんな」

第7話 手荷物検査

時間を少し遡る。

殺人事件があつた9月29日の朝。

舞台は南部小学校の5年2組の教室。

ちなみに、当然この時はまだ原七海は生きていたが、

担任のクラスを持たない音楽教師である原は、授業がないのいいことに、

保健室で「南部小の母」こと、小川保健師と一緒にお茶を飲んでいた・・・

山村遼は、青ざめた。

担任の加山が下校間際、突然手荷物検査を言い出したのだ。

「さあ、みんな。机の上にランドセルと道具箱を出して！」

加山は若く、なかなか2枚目の教師だ。

教育熱心で少々猪突猛進なところはあるが、生徒からも保護者からも人気がある。

だからこの突然の手荷物検査に生徒たちは「えー!?」と言いながらも拒むことはなく、

言われた通りにランドセルと道具箱を机の上に出した。

一昔前までは、ランドセルと言えば黒と赤だったが、最近ではその

種類は多岐に渡り、

2組の机の上はまるで花でも咲いているかのように明るくなった。

が、遼の心は暗かった。

どうしよう・・・

見つかったらどうしよう・・・

加山が順にランドセルと道具箱の中を見て回っている。

30人以上の生徒がいるクラスだ。

そんな細かくチェックする訳ではない。

加山の目的は、CDや漫画本だから、ちょっと除けばすぐに見つかる。

ランドセルに手を入れ、がさごそと中を見て、「はい、終わり」である。

中には加山に目的の物を見つけられてしまう生徒もいたが、加山はそれで生徒を罰したりはしない。

「もう持ってこないように」と注意するだけだ。

だけど、遼の持っているソレは「もう持ってこないように」で済むようなものじゃない。

一応ランドセルの底に隠すように入れてはあるが、注意深く探せば見つけられるかもしれない。

ああ！次は僕の番だ！！

「よし。山村だな。ランドセルを開けて」
「・・・はい」

拒否すれば逆に細かく調べられるだろう。

遼はおずおずと紺色のランドセルの蓋を開けた。

加山が2、3冊の教科書を取り出し、ランドセルを覗き込む。

遼は心臓が止まるかと思った。

が・・・

「よし。じゃあ次は道具箱だ」

あれ？

見つからなかった？

・・・よかった・・・

ああ、よかった！！！！

遼はこの時ほど、神様に感謝したことはなかった。

そして再び、殺人事件の翌日。

言うまでもなく、原七海はもうここにはいない。

南部小学校は朝から全校集会が開かれ、教師も生徒も悲しみに打ちひしがれたが、そこはやはり元気な小学校。

1限の授業が始まると、辺りはたちまち活気に溢れた。

ただし一箇所を除いては。

「こちらです」

「お忙しいところすみません」

武上の相方の三山は礼儀正しく頭を下げた。

「相方」と言っても三山は40代。

武上の大先輩だ。

「保健室の方、空けてしまつて大丈夫ですか？」

「はい。今は誰もいませんし」

小川は微笑んだ。

「南部小の母」と言われるだけあつて、落ち着いた雰囲気の50歳くらいの女性である。

三山は殺された原七海のことを聞きに南部小に出向いたのだが、校長室がわからずに校門の前でうろちょろしているところを小川に助けられた。

小川が校長室の扉をノックする前に、三山は訊ねてみた。

「小川先生は、原七海さんのことをご存知ですか？」

小川は驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「え？もちろん知っていますよ？教師と生徒の名前と顔は全部覚えています」

三山は舌を巻いた。

教師はともかく、生徒も？
200人以上はいるぞ！？

「原先生は、若くてかわいくて・・・私から見れば、教師と言うより生徒みたいな存在でした」
「はは、なるほど」

50歳くらいの小川から見れば、25歳の原七海は子供みたいなものだろう。

「お嬢様育ちなのか、ちょっと世間知らずなところはありましたけど、とてもいい先生でしたよ。
生徒からも人気がありました。実はこっそり私と保健室でお菓子を食べたりもしてたんです」

小川は笑顔でそう言って・・・目を伏せた。

「もう、そんなこともできないんですね」

「・・・」

「あ、すみません」

小川はすぐに教師の顔に戻ると、校長室の扉をノックした。

「失礼します。警察の方がみえました」

「お待ちしております、どうぞ」

中から快活な声がした。

「失礼します」

三山は目の前の校長を見て、自分の小学校時代の校長を思い出した。いかにも「校長先生」という感じの優しそうな男だった。

「校長の尾高おだかと申します」

「警視庁捜査一課の三山です」

「お一人ですか？」

「はい。相方がいるのですが・・・別の場所で聞き込みを」

ラーメンを食べながら。

「そうでしたか。どうぞ、おかけください」

三山がソファに腰を下ろすと、小川が「失礼しました」と校長室を辞した。

三山は原七海が殺されたことにお悔やみを言い、すぐに本題に入った。

「早速ですが、原七海さんのことをお伺いします。何か人に恨まれるようなことはありませんか？」

「いえ、そんなことは・・・少々勝気でわがままなところはありませんが、
それも『原先生は子供だなあ』と笑って済ませられる程度のことです」

「個人的にトラブルなどは？」

「聞いていません。問題を起こしたことはありませんし」

「そうですか・・・」

だが、そういう人間こそ意外な一面を持っていたりするものだ。

「・・・」

「何か？」

「いえ・・・その・・・」

尾高校長は口を噤んだ。

「どんなことでも結構です。教えて頂けませんか？」

「そうじゃないんです。そういうことでしたら、私より適任者がいると思ったので」

来た。

これはいい流れだ！

「どなたですか？」

「・・・うちの加山という男性教師です。原先生と個人的な付き合いがあったようです」

第8話 お上の威厳

どの手段が一番効率的で確実に道德的か。

武上は散々悩んだが名案は思い浮かばず、結局「お上の威厳を発揮する」という、

最もナンセンスな方法を選んだ。

「ここに立って、下校する生徒を見てればいいんですか？」

「はい。お願いします。生徒にはできるだけ厳しい顔をして下さい。でも、教師が来たら『パトロール中なんですよー』みたいな愛想のいい顔をして下さい」

「はあ？」

武上に強引に借り出された派出所の巡査は首を傾げるばかり。

だが本庁の刑事に逆らう訳にもいかないし、

「先日起きた殺人事件の捜査なんです」と言われれば、胸がときめかないこともない。

この平和な町で初めての殺人事件！

しかもその捜査に巡査である自分が加われるなんて！

巡査は不謹慎とは思いながら、ワクワクした。

しかしこの刑事の要求はよくわからない。

とにかく「『お巡りさん』を見て怯える生徒を探したい」と言うの

だ。

そういう訳で、巡査は当たり前だが警察の制服を着て、怖い顔で下校中の南部小学校の生徒達を見ていた。

そして、教師が来たら、愛想よくする・・・結構難しい。

しかも、いくら怖い顔をしていても、「お巡りさんだー」「拳銃持ってる？」と、

無邪気に近寄ってくる子供も少なくない。

いつもならそんな子供達にも親切な巡査だが、

ことは殺人事件の捜査だ！

今日ばかりは怖いお巡りさんで通さねば！

武上はそんな巡査の横で、彼に負けないほど険しい顔で子供達を見ていた。

「お上の威厳を発揮する」というのは、早い話が、

「悪いことをした子供は、お巡りさんを見たら怯えるはず」という、至ってシンプルな発想のことである。

もちろん多少度胸のある子供なら、お巡りさんごときに怯えたりはしないだろうが。

巡査とは違い、スーツ姿の武上は子供達からは「お巡りさん」と認識されるはずもないのに、

それでも険しい顔になってしまうのは、やはりこの子供達の中にラパンがいるかもしれないからだ。

殺人を扱う捜査一課の武上は、普段子供を相手に仕事をするのはほとんどない。

だからこうやって本物の小学生を間近で見ると、こんな子供が犯罪を犯しているなんてとても信じられなかった。

しかし現実には、ラパン事件以外にも小学生が起こした事件はたくさんある。

気を抜いてはいけない。

和彦には「そんなんで見つけられるのか!？」と馬鹿にされたが、確かに自分でも名案だとは思わない。

巡査を見て、うまく真っ青になる子供なんているかな？

そう、あの子みたいに・・・

「ん？」

「武上さん」

二人は同時にその少年に気づいた。

ちょうど校門から出てきた、4、5年生くらいの男の子なのだが、巡査を見た瞬間、文字通り真っ青になったのだ。

武上と巡査は頷き合って、その男の子に近づいた。

男の子は、青い顔のまま立ち尽くし、今にも泣き出しそうだ。

巡査が声をかける。

「君、ちょっといいかな」

「・・・」

男の子は口を真一文字に閉じたまま、両手を握り締めて小さく頷く。

「名前は？」

「・・・」

武上は名札を見た。

「5年2組 山村遼」と書いてある。

これが大人なら、その場ですぐに職務質問、となるのだが、相手は小学生、しかも下校時間真っ只中の学校の前と来ている。すでに注目の的だ。

武上は巡査を学校の前に残し、山村遼を人目のつかない場所へ・・・学校の裏の畑の方へ連れて行った。

「山村君だね？僕は刑事の武上って言っただ」

「・・・」

一応警察手帳を見せる。

山村遼はもうじゅうぶんに怯えているから、今更「お上の威厳」は必要ないが、

子供相手でもきちんと身分を証明しないといけないと思ったのだ。

「ランドセルの中、見せてくれないかな？」

山村遼は、素直に従った。

もう、アレはランドセルに入っていない。
昨日の手荷物検査で懲りた。
アレを学校に持ってくるのはやめたんだ。

山村遼がランドセルの蓋を開けると、
武上は中をしっかりと確認した。
教師の加山の手荷物検査とは訳が違う。

が、武上の予想通り、怪しいものは何もなかった。
しかし刑事としての武上の直感「この子だ」と言っている。

「見つかって困るような物は何もないね」
「・・・はい」

安心してやっと声が出た。
それでもかろうじて聞き取れるくらいの小さな声だ。

「昨日、ここの先生が殺されたのは知ってるね？」
「はい」
「テレビでは報道されてないけど、そこにラパンのカードがあった。
犯人が置いて行ったんだ」
「・・・え？」

武上は何の前置きもなく、いきなりラパンの話題を、
しかも殺人事件の話題を出した。

小学生相手に、優しいとはいいいかねる態度だが、これは成功した。

山村遼はますます青くなり、急にペラペラと話し出したのだ。

「ぼ、僕知りません！本当です！殺人事件なんて・・・僕はただ・・・」

「ただ？」

「ただ・・・その・・・カードを・・・」

「カード。ラパンのカードだね？あれは君が作ったのかい？」

「・・・」

「作っただけじゃないよね？カードを使って、色んな物を盗んだんだよね？」

「・・・」

認めれば自分が犯罪者になることくらい、山村遼にもわかる。簡単には領けない。

仕方がない。

武上は更に続けた。

「そして、原先生も殺したのかい？」

「ち、違います！僕、原先生を殺したりしません！本とかを盗っただけです！」

山村遼は「しまった！」とばかりに両手で口を押させた。そんな仕草は本当に子供っぽい。

これが、ラパンの正体か。

まさか本当に小学生だったなんて。

武上はため息をついた。

「じゃあ、窃盗・・・物を盗んだことは認めるんだね？」

「・・・はい」

「でも、人殺しはしてない」

「はい！してません！」

山村遼は必死で訴えた。

武上としても、元々窃盗と殺人は別の犯人だと思っていたし、実際に山村遼を見ても、とても人殺しをできるような子には見えなかった。

だが、犯罪は犯罪だ。

きちんと罪を償わないといけない。

武上は重苦しい気分で、山村遼の腕を取った。

第9話 激怒

「どのガキだ！」

「か、和彦！」

武上は焦って、和彦を制した。

なんと言ってもここは、警察署内だ。

たださえも目立つ和彦にこんなところで大騒ぎされては困る。

「和彦さん。落ち着いてください」

思わず寿々菜も和彦をなだめる。

「餃子なら、また差し入れますから」

「そーゆー問題じゃない！」

武上は心の中で舌打ちをした。

自分の考えた作戦で見事ラパンを逮捕したことを、得意になって和彦に電話してしまったのだ。

てつきり和彦は地団太を踏んで悔しがると思ったのだが、甘かった。和彦はラパンこと山村遼が連行された警察署に押し付けてきたのだ。

「俺の餃子を、よくも！」

とにかくロビーでは目立って仕方ない。

武上はやむを得ず、和彦と寿々菜を山村遼のところへ連れて行った。といっても、もちろん直接会わせるわけにはいかない。

和彦と寿々菜を一応「ラパンの被害者」ということで、
なんとか取り調べ室の隣の部屋へ入れる許可を取ったのだ。
そこからは、マジックミラー越しに山村遼を見れる。

「本当はここは、一般人は入れないんだぞ」

「俺と寿々菜は芸能人だ」

「・・・」

武上はもう何も言わないことにした。

山村遼は相変わらず真っ青だったが、とりあえず自分が殺人犯扱い
されていないことに安心したらしく、
取調べにも素直に応じていた。

「あいつか・・・」

「本当にまだ子供ですね」

寿々菜の言葉に武上は頷いた。

「はい。小学5年ですからね。盗んだものも全部手をつけずに家に
隠してあるそうですし・・・

大した罪にならないといいのですが」

「手をつけずに、って餃子は食ったんだろ」

「・・・」

「それだけでも重罪だ！」

どうやら和彦の頭からは殺人の件は綺麗さっぱり消えているようだ。

と、その時。

廊下が騒がしくなった。

「遼！」

武上が椅子から立ち上がり、廊下を見る。
どうやら、山村遼の両親が来たようだ。

担当の刑事が対応している。

「息子は！？」

必死の形相の女性は山村遼の母親のようだ。
まだ若いだろうが、ずいぶんと白髪が目立つ。

「今、取調べ中です」

「取調べ・・・」

「窃盗については罪を認めています」

「窃盗については、というのはどういことですか？」

母親よりは落ち着いているのか、父親らしき男性が刑事の言葉に敏感に反応した。

「実は、昨日起きた殺人事件の現場にもラパンのカードが落ちていました」

「なんですって！？」

母親がふらついた。

その腕を父親が取ろうとするが、母親はそれを振り払った。

「遼が人殺しなんてするはずありません!!」

「ですが、殺害現場のカードは間違いなく遼君が作ったものと同じです。」

それに殺されたのは、遼君の小学校の音楽教師です。遼君も教わったことがあります」

今度こそ母親は床に座り込んでしまった。

「そんな・・・遼が・・・あの音楽教師を・・・」

武上たち3人は、取調室の隣の部屋のドアから顔だけ出してその様子を見ていたが、
寿々菜が突然和彦を見上げた。

「和彦さん」

「お」

来た。

違和感だ。

あの母親の様子。

何かおかしい。

あの取り乱し様は、自分の子供に殺人容疑がかけられているからだ
けではないようだ。

「よし。任せろ」

和彦は勢いよく部屋を出て行った。

「おい！勝手に・・・！」

武上の制止も全くきかず、和彦は山村遼の母親の前に立った。

「あ！」

「・・・御園英志？」

父親と母親がすぐに和彦に気づき、啞然とする。

こんな状況でも和彦のことを「KAZU」とは言わず、「御園英志」と言ってしまうほど、

「御園探偵」好きらしい。

でもそのせいで、息子がラパンの真似事なんぞするんだ。

と、和彦は心の中で毒づいた。

御園英志役の和彦としては、喜ぶべきことでもあるかもしれないが、それで餃子を盗まれるのでは、たまったもんじゃない！

「ど、どうしてこんなところに・・・」

和彦は鼻を鳴らした。

さすがにKAZUモードで行く気はないらしい。

「俺も、お宅の息子さんの被害者なんで」

「え？ドラマの話ですか？あれ？でも息子は、現実・・・」

混乱してるらしい。
まあ、当然である。

「ドラマの中でも怪盗ラパンにしてやられてるけど、現実にも山村遼に餃子を盗まれたんだよ」

「ぎょ……餃子、ですか」

「そうだ。前の日曜に、公園で俺がCMの撮影をしている間に、盗みやった」

「……ああ！そうだ！」

父親が頷いた。

「息子とY公園に遊びに行ったら、たまたまあなたがいて……
うちはみんな『御園探偵』のファンなんで、見学させてもらったんです」

「そ、そうか」

さすがに面と向かって「ファン」と言われると、悪い気はしない。
いや、ダメだ。

餃子だ、餃子！

「あの時、まだ昼ごはんを食べてなくて、息子はお腹をすかしてましたから……」

思わず食べてしまったのかもしれませんが。申し訳ありませんでした」

父親は和彦に深々とお辞儀をした。

一方母親は、まだ状況が理解できないらしく、床に座ったままぽかんとしている。

「謝るんなら、代わりにちよつと答える。おい、あんた山村遼の母

「親か？」

「え、は、はい」

母親が慌てて立ち上がる。

「遼の母親の山村静香と申します」

「あ、私は父の山村昇平です」

俺はなんて名乗ったらいいんだ？

KAZUか？岩城和彦か？御園英志か？

まあ、俺のことは知ってるみたいだから、どうでもいいか。

「殺された音楽教師・・・なんつったつけ？原？そいつのこと知ってるのか？」

「え・・・」

二人は固まった。

顔に「はい」と書いてある。

「よし。ここからは担当の刑事が窃盗専門の奴から殺人専門の奴に変わるからな」

和彦に振り向かれた武上は、げんなりとした表情になった。

第10話 2人の容疑者

結婚したことのない武上にもわかる。

山村夫妻はうまく行っていないようだ。

そこに、息子の窃盗事件。

加えて、まだどう関係があるかわからないが、息子の小学校教師の殺害事件。

話を聞くにしても、別々の方がよさそうだ。

山村静香を廊下で待たせ、武上は山村昇平と小さな部屋で向かい合
って座った。

山村昇平の職業など一般的な質問の後、早速本題に入る。

「山村さんは、原七海さんをご存知ですか？」

山村は首を振った。

「いえ。あ、顔くらいは知っています。以前、日曜参観があつて、
その時音楽の授業で・・・。

でも原先生と話したりしたことはありません」

「そのわりに、奥様が原七海さんのことで動揺されてましたが」

「・・・あの、これはあくまで私の意見なのですが」

山村は声を潜めた。

「なんですか？」

「原先生を殺したのは・・・妻かもしれません」

「原先生を殺したのは、主人かもしれません」

「はあ。そうですか」

なんなんだこの家族は。

さすが「御園探偵」のファンだけあるな。
和彦め。

山村昇平から話を聞いた後、

今度は同じ部屋で山村静香から話を聞こうとしたのだが・・・

開口一番、コレである。

さすがに武上も面倒くさくなった。

更に面倒くさいことに、この夫婦。

どちらも本気なのだ。

本気で、自分の配偶者が人殺しをしたと思っている。

もちろん、どちらかが演技をしている可能性もあるが。

「なるほど。では、ご主人が原七海と浮気していた、と？」

「はい」

「どうしてそう思うんですか？」

ここで、女の勘です、とでも来たら、武上はもう取り調べを終わろうと思っていた。

だが、返ってきた答えは意外な物だった。

「手紙が来たんです」

「手紙？」

「はい。昨日の朝、うちのポストに。そこに『山村昇平は原七海と浮気している』と書かれていたんです」

「なんですって？」

武上は身を乗り出した。

「その手紙は！？」

「それが・・・捨ててしまいました。宛名は私だったんですが、差出人も書いてなかったし、イタズラだろうと思って。一応主人にも話しましたが、そんなことはないと言っていました。

でも夜になって、原先生が殺されたというニュースが流れて・・・」

「浮気がバレたご主人が、原七海を殺したと思ってるんですね？」

「はい」

逆に山村昇平は、浮気を疑った妻が怒って原七海を殺した、と思っている訳だ。

武上は頭を抱えた。

その頃。

南部小学校の中にいた三山は、

（まさかその外で武上が「お上の威厳」作戦を決行していたとは露知らず）

原七海と個人的な付き合いがあったという加山教師と対面していた。

既に10分近くが経過していたが、話は一向に進まなかった。
なぜなら・・・

「ぐすん、ぐすん」

「・・・お気の毒です」

「はい・・・彼女は本当にいい子で・・・」

この会話がエンドレスに繰り返されていたからだ。

武上ではないが、三山も頭を抱えなくなった。

だが、ここでこうしていても犯人は捕まらない。

三山はなんとか本題を切り出した。

「原七海さんとは、どれくらいの期間、お付き合いなさってましたか？」

「ちょうど1年です。そう、あれは一年前のこと・・・」

思い出話に突入する前に、三山は素早く軌道修正する。

「原さんが何か人に恨まれるようなことはありませんか？」

「そんな！」

「いえ、そんな人ではないと校長先生からも伺いました。でも、個人的に原さんと親しかった加山さんでしたら、他の人が知らないようなこともご存知かと・・・」

三山は、あえて加山の優越感をくすぐる言い方をした。

「他の人は知らないけど、恋人のあなたなら・・・」という訳である。

加山のような男は、こういう手に限る。

案の定、加山は照れながら「うーん」と考え込んだ。

「かわいい人ですからね。同性から妬まれることや、振った男に逆恨みされることはあったかもしれません」

「はあ」

「悪気なく、さらっときつい事を言ったりもしましたし」

じゅうぶん恨まれる要素を持つてるじゃないか！

三山はなんとか堪えた。

「あの、一応お聞きしますが、加山さんは昨晚の１０時頃何をされていましたか？」

だが加山はそれがアリバイを聞かれてとは思わなかったらしい。

三山は、「白木寿々菜の男版だな」と考えたりした。

「家にいましたよ？」

「ご家族は？」

「一人暮らしです」

「・・・」

まあ、一応。

本当に一応、加山のアリバイ確認はしておこう。
時間があれば。

その時、若い女性教師が教室に駆け込んできた。

「加山先生!!」

「どうしました?」

その余りの慌てように、加山がギョツとする。

「山村君が警察に・・・!」

「何だって!?!」

勢いよく加山が立ち上がった拍子に椅子が倒れ、
その音が教室中に響き渡った。

第11話 ファン

「ふーん」

「・・・それだけか？」

「ラパンは捕まったんだ。俺にはもう関係ない」

場所は再び来来軒。

ただし時間は夜中の12時。

閉店直前に「ラーメン、チャーハン、餃子」と来た日にゃあ、店の人もイラッとしそうなものだが、

そこは常連の強味で、寿々菜用に杏仁豆腐までサービスしてくれた。

「あの。武上さん、お話の続きを・・・」

とりなすように寿々菜が言った。

「あ、はい。とにかく窃盗のラパン事件は解決しました。そして、ここからは殺人のラパン事件です」

「はい」

「容疑者は3人」

武上は手帳を見ながら説明した。

一人目は、山村昇平。本人は否定しているが、原七海と浮気していた可能性がある。

山村遼の父親なので、ラパンの正体が息子だと気づいていれば、ラパンのカードは手に入れられる。

二人目は、山村静香。夫が原七海と浮気していたと思っている。カードについては、昇平と同じ。

「そして三人目は、山村遼の担任の加山仁志^{かやまひとし}。原七海の恋人です。今日、三山さんが会ってきましたが、印象としては悪い人物じゃないようです。ただ・・・」

「ただ？」

「山村遼が警察に連れて行かれたと聞いた時の様子が普通ではなかったのです、

三山さんが聞いたあたり、ラパンの正体が山村遼だと知っていたようなのです」

「え？」

和彦と寿々菜はラーメンから顔を上げた。

「原七海が殺された日の下校前に、生徒の手荷物検査をしたそうなんです。」

その時に、加山は山村遼のランドセルの中に数枚のラパンのカードを見つけた、と言う訳です」

「それで、その先生はどうしたんですか？」

「どうもしなかったそうです。まさか、とは思ったらしいのですが、確信は持てなかったし、

仮に山村遼がラパンだとしても、自分の生徒を警察に突き出したりはしたくなかった、と」

和彦は愛おしそうに（？）餃子を食べながら言った。

「じゃあその加山って教師も、ラパンのカードのありかを知っていた訳だ。」

なあ、殺害現場にあったカードは、本当に山村遼が作った物なのか？」

「きちんと鑑識で見てもらった。間違いなく同じだ」

「ほー。じゃあ犯人はその3人のうちの誰かだろーな。ま、頑張れ」
「・・・」

「あ、あのー！」

寿々菜がまた助け船を出す。

アノ寿々菜がここまで気を使うのだから、

この場の険悪なムードがいかほどのものか理解して頂きたい。

「山村遼くんって、どうなっちゃうんですか？ 刑務所に入れられちゃうんでしょうか？」

武上は笑顔で寿々菜を見た。

「寿々菜さんは優しいですね」

けっ。

と思ったのは、もちろん和彦である。

「山村遼は未成年ですから、刑務所に入れられることはありません。それに、

今回は父親の山村昇平が全ての品を高額で買い取るということで、店側はどこも被害届を出さないことになりました」

「じゃあ・・・」

「はい。実質お咎めなし、です。ただ、これだけ世間で話題になってしまってますから、

マスコミに対しては何らかの説明が必要ですね」

「そうですか。よかった」

寿々菜は胸をなでおろした。

いくら窃盗犯とは言え、実際に小学生の山村遼を見てしまうと、寿

々菜は同情せずにはいらなかった。

それに、元はと言えば「御園探偵」好きが高じての事。
寿々菜には、山村遼の気持ちが見えなくてもいい。

そうだ。それに、御園英志である和彦さんが、山村遼くん逮捕の手助けをした。

本当に「御園英志 vs ラパン」だね。

寿々菜は半ば感激した。

「それにしても、一つ一つは安い物ですが、12個ともなると・・・
しかも、高額買取となると、
結構な金額になりますね」

「いくら位なんですか？」

「さあ。5、6万はいくんじゃないですかね」

・・・。

寿々菜は首を傾げた。

「寿々菜。今のは俺にも分かったぞ」

「え？」

「違和感、だろ？」

寿々菜は頷いた。

和彦は何故か少し嬉しそうだ。

「和彦？なんのことだ？」

「いや」

和彦は餃子を箸でつまんだ。

「山村遼つてのは、かなりの御園探偵ファンだな、と行ってさ」

第12話 余り

武上は、三山の後ろを歩きながら少々不機嫌だった。
その理由は、三山の前を歩く和彦。

ただ、武上の横に寿々菜がいるので、多少はその不機嫌さも緩和されてはいたが。

一方、その寿々菜は和彦の横を優越感たっぷりに歩く（寿々菜にはそう見える）山崎に、
殺人的な視線を送っていた・・・。

「度々すみません、小川先生」

三山が申し訳なさそうに言うと、和彦の前を歩く小川が笑顔で振り返った。

「いえ。保健室から校門の辺りがちょうど見えるので」

あの来來軒での会合（？）から3日。

和彦が突然武上に「犯人がわかったから、南部小に行くぞ」と電話して来たのだ。

「・・・なんで俺がお前に呼び出されないといけないんだ」

と、武上は当然文句を言ったが、和彦には通じない。

「ついでにラパンのカードと、山村遼が盗んだ品も持って来い。後、山村夫妻と加山も呼んどけ」

加山は南部小の教師だから呼び出す必要もないが、

山村夫妻は、特に、山村昇平は仕事があるだろうから来れないだろうと武上は思った。

が。

「御園探偵の呼び出しなら、喜んで！」と承諾してしまった。

しかも、犯人が分かるかもしれないとなると、先輩の三山にも来てもらわないといけない。

くそ！これで犯人が分からなかったら公務執行妨害で逮捕してやる！！

で、そろそろと南部小学校へ来たところをまた小川が見つけてくれて、

こうして校長室へ案内してくれているのだ。

校長室へ入ると、尾高校長と加山が既に中で和彦たちを待っていた。

「お忙しいところ、申し訳ありません」

武上は早速謝り、チラッと和彦を睨んだ。

しかし、尾高校長も加山も突然のKAZU登場に目を丸くするばかりだ。

ちなみに当然、というか、やはりスウのことは知らないらしい。

寿々菜もこんなのは慣れっこなので、いちいちショックを受けたりしない。

もっともいちいちショックを受けてたら、心臓がいくつあっても足りないだろう。

「あの・・・犯人が分かったと言うのは・・・御園探偵、じゃなかった、KAZUさんが？」

「はあ」

尾高校長の言葉に武上は仕方なく頷いた。

加山など、自分が容疑者候補だとは知らず、目を輝かせている。

寿々菜と山崎も、また和彦の推理を聞けるのかと思うと、目の一つも輝かせたが、

同時に睨み合うことも忘れない。

だがまあ、今日ここに和彦が来れたのは山崎の巧みなるスケジューリング力のお陰ではある。

寿々菜もそれは認めざるをえない。

「和彦。さつさと始めろ」

「なあ、これで解決したらギャラって出ねえの？俺、結構走り回ったんだけど？」

「出るわけないだろう」

だが、

もしかしたら感謝状を出さなきゃいけないか・・・と思うと、

武上は気が重かった。

「俺はいいけど、うちの社長は黙ってねーぞ？」
「・・・」

武上は、あの見た目はダルマ、中身は狸の門野社長の顔を思い浮かべ・・・

更に気が重くなった。

「ま、いいや。武上、山村遼が盗んだ物を盗んだ順に並べろ」

「俺はお前の助手じゃない！」

「わかってるさ。俺の助手は寿々菜だ。な？」

和彦が寿々菜に微笑みかけると、寿々菜はたちまち真っ赤になり、武上に「私も手伝います！」と言って腕まくりをした。こうなると、武上もやらざるを得ない。

三山は3人の様子を、笑いをかみ殺しながら見ていた。

そして、2分後には盗まれた12個の品が順番に机の上に並べられていた。

消しゴム、お菓子、雑誌、服、宝石・・・

その前に、和彦がカードを置いていく。

「これで、よし、と」

12個の品に、12枚のカード。

「・・・で？」

武上が和彦を見た。

「なんだ、武上。気づかないのか？」

「何にだ？」

「やれやれ」

和彦は山村昇平の方を向き、言った。

「なあ、あんた、寿々菜に金払ったか？」

「え？」

「寿々菜も山村遼から餃子を盗まれたんだよ。ちゃんと高額買取してくれるんだろうな？」

「そ、そうでしたね！おいくらお渡しすればよろしいでしょうか！？」

山村昇平が慌てて財布を出そうとする。
が・・・

「そうか」

三山と武上が同時に頷いた。

「和彦君が騒いでいたので逆に餃子なんて忘れてた。餃子はここにはない」

三山は机を指差した。

そりゃ、餃子はここになくて当然だ。
山村遼が食べてしまったのだから。

「そう。そして、餃子のカードNO・は『12』だった。だから本
当のカードの割り振りは、
こう、だ」

和彦はカードをずらした。

NO・1のカードを消しゴムの前からお菓子の前へ、
NO・2のカードをお菓子の前から雑誌の前へ・・・
そして最後に、NO・12のカードをエア餃子の前に。

「くそ。餃子はなんでないんだ」

訳の分からない文句を言いながらも、和彦は全部のカードをずらし
終えた。

そして、消しゴムだけがカードを割り振られることなく、
ポツンと一つ残ったのである。

第13話 裏話

警察は当初、窃盗のラパン事件を真面目に取り扱っていなかった。だから、どのNO.のカードがどの盗品と結びついているかなんて、気に留めなかった。

ちよつとしたものが盗まれて、そこにウサギのカードが置いあった、くらいに思っていたのだ。

そしてそのカードが「御園探偵」のラパンの予告状と似ても似つかなければ、そのまま闇に葬られる事件だっただろう。

「この消しゴムは・・・？」

三山が消しゴムをつまみ上げた。

「それは、ここの近くの文房具屋で息子が盗った物です」

山村静香が言った。

「先日、どの品をどこで盗ったか息子から聞き出し、一軒一軒お店に電話して謝ったんです。

その消しゴムは、息子が一番初めに盗った物です。間違いありません」

「カードは置かなかったんですか？」

「さあ・・・そこまで聞いてません。当然、置いてると思ってましたし、

警察の方からも、窃盗現場にあったカードは全部で12枚と聞いて

いましたので、
品物の数と一緒にだな、としか思いませんでした」

ここでも餃子の存在は完全に無視されていたわけだ。

本来ならば、盗品は餃子を含めて13個、カードは12枚、である。

武上は腕を組んだ。

「じゃあ、山村遼は、消しゴムを盗った時はカードを置かなかったのか？」

「いや、置いた」

和彦は確信に満ちた声で言った。

そして・・・寿々菜が「あ！」と声を上げた。

「そうか！NO・0のカードですね！？」

「なるほど！」

「ああ！」

山崎と山村夫妻の声も重なる。

残りの面子・・・三山、武上、尾高校長、加山、それになんとか出て行きそびれた小川は、

訳がわからず、ぽかーんとした。

「NO・0のカード？」

「おい、武上。もうちょっと真面目に『御園探偵』を見る」

「そんな暇、あるか」

「まあ、真面目に見てても、かなりのマニアじゃないとNO・0のことなんて知らないか」

和彦は、「御園探偵」の裏話を始めた。

それによると・・・

「御園探偵」の怪盗ラパンは、当初第1弾にのみ登場するはずだった。

ところがいざ放送してみると、思いのほかラパンに人気が出た。

これはいける、とそれ以降の「御園探偵」にも毎回登場することになり、

いつの間にやら御園英志の宿命のライバルになってしまった、

ということである。

「で、話の都合上、ラパンの予告状のウサギの眼帯にNO・を振る
ことになったんだが、

それが決まったのは第2弾を作っている時で、既に第1弾は放送済みだった。

当然、第1弾のウサギの眼帯にはNO・なんか振っちゃいない。

だから、第2弾のNO・を『1』にして、第1弾はNO・なし・・・
じゃ格好がつかないから、

NO・0にしたんだ。『ゼロだから眼帯には何も書いてませんでした』ってな。

ま、後からのこじ付けだ」

「ゼロ・・・じゃあ、こないだ放送された第5弾のNO・は『4』
なのか？」

「そうだ」

「なるほど。NO・0、1、2、3、4。これで5枚って訳だな。
と言うことは・・・」

武上がハツとした。

「山村遼はそれを知っていて、最初に消しゴムを盗った時には、眼帯に数字が書かれていない、

NO・0のカードを置いていったんだな!？」

「そういうことだ。あるだろ、数字の書かれていないカード」

武上は恐る恐るポケットからカードを取り出した。

これだけは他のカードとは違い、ジッパーのついた透明の袋に入っている。

なんと言っても、殺害現場の遺留品だ。

「・・・で？どういうことだ？」

「だから、山村遼は文房具屋にそのNO・0のカードを置いたんだ。で、その店主がそれを見つけた」

「おい。和彦、お前どうしてそんなこと知ってるんだ」

和彦は肩をすくめた。

「カードと盗品の数が合わないって知って、『おお。そついや殺害現場のカードは数字がなかったからアレがNO・0ってことか』って気づいた。で、山村遼に『NO・0って知ってるか』って聞いたら・・・」

「和彦！お前勝手に!!」

「サインやったら、喜んでしゃべったぞ？」

「・・・」

「とにかく。山村遼はちゃんとNO・0の裏話を知っていて、文房具屋にそれを置いたって言ったんだ。

だから俺、わざわざ文房具屋に行っただんだぞ？」

忙しいのか暇なのか。

さすが御園探偵の主人公、と言っておこう。

「もしかしたらその文房具屋の店主が犯人かもしれないと思ったんだ。

でもさ、その店主、とても人殺しするような奴には見えねー。

カードはどうした？って聞いたら、全然覚えてないし」

「・・・」

「海賊みたいなウサギのカードだ！って力説したら、ようやく思い出したらしい」

「それで!？」

三山と武上は勢い込んだ。

「あげた、って」

「え？」

「南部小の生徒の落とし物だと思ったから、ここの教師らしい人間が買い物に来た時に渡したってさ」

「ここの・・・教師？」

尾高校長が青ざめる。

「それは・・・誰ですか？」

「さあ」

「さあ？」

「店主も、その教師の名前はもちろん知らないし、顔も覚えてないって」

「・・・そんなんで、どうして南部小の教師って思ったんだ・・・」

武上はため息をついたが、和彦は「そりゃ分かるだろ」と言った。

「ちょうど学校の昼休みにそいつが買い物に来たそうだ」

「それだけで？」

「それと、」

和彦は扉の近くへ視線を移した。

「白衣を着た女だ、って言ってた」

第14話 ラパン再び！

小学校の昼休みの時間帯に、白衣を着た女が買い物に来た・・・

文房具屋の店主が「南部小の保健の先生かな」と思つのも無理はない。

そして、その勘はおそらく正しかった。

その証拠に、和彦の言葉に小川は青ざめた。

「そ、そんな！それが私だなんて・・・証拠は！？」
「ない」

「だったら・・・！」

「ま、あのとぼけた文房具屋の店主があんたの顔を見て、思い出し
てくれることを期待してるよ。」

それと・・・えーっと、あんた、加山先生だっけ？」

「は、はい！」

和彦に突然名前を呼ばれ、加山は姿勢を正した。

「あんた、この小川って人に『ラパンは山村遼かもしれない』って
話したんじゃないか？」

「え？」

三山の表情が強張る。

「加山さん、本当ですか？先日はそんなこと一言も・・・」

加山はうなだれた。

「はい。小川先生に相談しました。小川先生は、僕達若い教師のいい相談相手ですので」

南部小の母、と言う異名を持つくらいだ。

加山が信用して山村遼のことを相談したのも頷ける。

だが、その南部小の母の顔は、いまや「母」とは程遠い物になっていた。

「どうして話してくれなかったのですか？」

「すみません。小川先生には何の関係もないことですから、巻き込むのは悪いと思って。」

小川先生にも『カードのことは忘れなさい』と言われていました」

和彦が小川の方へ歩きながら言った。

「あんたは文房具屋の店主から渡されたカードのことなんて忘れていたけど、

加山先生から山村遼のことを聞き、世間で話題になっているラパンの正体と、

自分がそのカードを偶然1枚持っていることに気づいた。

で、原七海を殺すことを思いついた。今なら、カードを使えばラパンのせいに行けるかもしれない、と」

「なんですって!？」

声を上げたのは小川ではない。

尾高校長だ。

「ラパンのせい、ということは、山村君のせいに行うと思ったと

いうことですか！？

生徒に殺人の罪を着せようとした、と？そんな馬鹿な！小川先生はそんなこと絶対しません！」

尾高校長は肩で息をした。

「ああ。そんなことは考えてないよな？小川先生」

和彦の声に小川が身を硬くした。
握り締められた両手がわなわなと震えている。

「ラパンの正体は、加山先生も知っている、しかも小学生だ、すぐに警察にもバレるに違いない・・・」

小川先生はそれでもラパンに罪を着せて原七海を殺した。こっからは俺の推測だけど、

小川先生、あんた、原七海を殺すと同時に、山村家を滅茶苦茶にしたかったんじゃないか？」

「・・・」

「『ラパンの正体は山村遼だ。しかも、もしかしたら殺人までしているかもしれない。』

いやいや、小学5年生にそれは無理だろ。周りの大人がカードを盗んで原七海を殺したんじゃないか？

そういえば、山村昇平は原七海と浮気してたらしいな。じゃあ山村昇平が犯人か？

もしかしたら、浮気に怒った妻の山村静香が真犯人かもしれないな』
つてな風に、世間は山村家を見る訳だ。山村昇平が原七海と浮気してるって手紙も、

小川が送ったんだろ」

「和彦。警察を舐めるな。警察は簡単にそんな目で山村夫妻を見たりしない」

「警察はな。それに調べれば山村夫妻が犯人じゃないことなんてすぐに分かる。」

第一、息子に罪を着せてどうするんだ。でも、真犯人が捕まらない限りは、

世間つてのは山村家をどことなく胡散臭い目で見るもんだ」

今度は山村夫妻が青ざめた。

世間の目に最も晒される芸能人が、しかもトップアイドルの和彦がそう言うのだから。

「あの一……」

ようやく寿々菜が口を開いた。

「小川先生が犯人だとして、原七海さんを殺したり、山村家を滅茶苦茶にしたり、って、

目的はなんなんでしょうか？」

寿々菜らしい率直な意見だ。

そんなことして何の意味があるのか寿々菜には分からない。

人間関係のもつれ……のようなことには、寿々菜は無縁だから。

しかしそういう理由で殺人を犯す人間もいる。

小川のように。

小川は言い逃れできないと思ったのか、突然声を荒げた。

「その女が悪いのよ！」

視線の先は……村山静香である。

しかし、本人は訳がわからないようで、動揺している。

「あの、私が何か？」

「1学期の日曜参観の日、あんた私に『残念ですね』って言ったでしょ！？」

「は？」

要領を得ない。

しかし小川は怒りで真っ赤だ。

「私が『遼君はかわいいですね。私には子供がないから羨ましいです』って言ったら、あんた、『お子さんがいらつしやらないんですか？それは残念ですね』って言ったでしょ！！！」

「・・・言った・・・でしょうか？」

村山静香は首を傾げた。

「私が子供を産めない身体だと知っていて、そう言ったのよ！」
「そんな！私、そんなこと知りません！」

だが、小川は聞き入れず、今度は和彦に向かって叫んだ。

「原先生だって・・・！私の前で、嫌味っばく『高齢出産は嫌だから、早く結婚して子供産みたいわ』
なんて言うから！それで！それで、私は・・・」

小川の言うことは事実だろう。

おそらく村山静香も原七海もそう言ったのだろう。

確かに二人とも配慮に欠ける点はある。

しかし、そこに悪意があつたとは思えない。

だが言われた本人は、底知れぬ悪意を感じたのだろう。

特に、こういう問題はデリケートである。

「それで、二人を恨んでた。ラパンのカードを利用して、

原七海と村山静香に一気に仕返ししようと思ったんだな？」

「・・・」

校長室の中に重苦しい沈黙が流れた。

「ギヤラは？感謝状は？」

「出る訳ないだろ」

「ケチだな、警察ってのは」

和彦はネクタイを緩めた。

ここはテレビ局内のスタジオ。

先日第5弾が放送されたばかりだと言うのに、早くも「御園探偵第6弾」がクランクインしたのだ。

理由は言わずもがな。現実のラパン事件の反響だ。

しかも、門野社長がまた強引に「アイドル探偵」の特番を組み、

「現実のラパンも、御園英志が捕まえた！」と言う触れ込みで大々

的に宣伝したものだから、

御園探偵ファンから「早く第6弾を見たい!」との要望が殺到した。

こんな高視聴率を取れる機会をテレビ局が逃すはずもなく。

和彦はたださえでもいっぱいっぱいのスケジュールを割いて、こうしてスタジオにいるのだ。

「これでまた稼げるんだから、警察からの礼なんぞいらんだろ」

「あゝあ、頑張ったのに」

「ラパンを捕まえるのは御園英志の仕事だ」

「・・・」

どうしてここに武上がいるのか。

ラパン事件解決の礼を言いに来たのだ。

ただし、和彦ではなく、寿々菜に。

では、どうして寿々菜がここにいるのかと言うと・・・

「和彦さん!武上さん!」

寿々菜がセットの中から飛び出してきた。

「・・・寿々菜、なんだその格好」

「どうですか!?!」

寿々菜は二人の前でクルツと回ってみせる。

黒いミニのワンピースに黒いストッキング、白いエプロン。

どう見ても、メイド喫茶のメイドさんだ。

「かわいいです！寿々菜さん」

武上は本気で言った。

「ありがとうございます！」

「寿々菜。お前の役はメイドじゃないだろ？」

「はい！御園英志の助手です！」

寿々菜は、2度に渡り和彦と共に殺人事件を解決した、と言うことで、

「逆に現実の人間をドラマのキャラにしてしまえ」とばかりに、なんと「御園探偵」で本当に御園英志の助手役に抜擢されたのだ。

衣装がメイドさんなのはさて置き、大出世である！！！！

「でも、私、今回のラパン事件は全然お手伝いしてないのに・・・」

「そんなことはありません！寿々菜さんの『違和感』があつたからこそ・・・」

「おい。それを言うなら、俺の方が頑張ったぞ」

「うるさい」

「それに寿々菜。お前、第4弾で死体役で出てたのに、なんでいきなり助手役で復活してるんだ」

「別の役ですから」

それはそうだろう。

その時。

「スウちゃん」

「あ！宮下さん！」

寿々菜は、微笑みながら寿々菜に近づいてきた人物に手を振ると、武上を振り返った。

「武上さん。この人が、」

「本物のラパン、ですね？」

紹介されなくてもわかる。

右目にトレードマークの眼帯をしているのだから。

「宮下さん。この武上さんが、こないだのラパンを逮捕したんです」

ややこしい。今寿々菜が言っているのは、山村遼のラパンのことだ。

「そうですか。でも、前の特番だと、実際解決したのはKAZUとスウちゃんだって言ってたけど？」

「あ。和彦さんと武上さんが二人で協力して」

協力なんてしてない！

「へえ。凄いね。でも、」

宮下は寿々菜に微笑みかけた。

「僕は、スウちゃんに逮捕されたいね」

おい！

和彦と武上は、寒くなりながらも宮下を睨んだ。

みやしたまこと
宮下真は和彦ほど有名ではないが、今やすっかり「本物の怪盗ラパン」として、

メディアに引つ張りだこだ。

しかも、ルックスのほうは和彦に負けていない。

和彦と同じく中性的な顔立ち。

体系は、和彦より細く、背は武上より高い、といった感じで全体的にスラッとした印象だ。

そんな宮下にニコニコと笑いかけられて、

寿々菜は真っ赤である。

寿々菜さん！

あんな寒い奴に照れちゃダメですよ！

おい、寿々菜。

お前、俺のファンじゃなかったのかよ？

和彦と武上は・・・

珍しく意気投合し（？）、ため息をついた。

第14話 ラパン再び！（後書き）

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございます。

性懲りもなく作った第2弾ですが、いかがだったでしょうか・・・
凄く不安です。

このシリーズは、できればあといくつか書きたいと思っています。

今後とも、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7641k/>

アイドル探偵 2 「餃子の恨みはしつこい」編

2010年10月14日13時49分発行